

HIDAKA, R., and SHIMIZU, I., 1952:

(R)

"Book Review Psychology of Fascism: E. Fromm, *Escape from Freedom*," in: *Sekai*, Tokyo (Iwanami Shoten), No. 75 (March 1952), pp. 123-132.

Japanese

- 1 A Criticism of Civilization: Psychology of Fascism (p. 124)
- 2 Salvation of Man: Socio-economic Factor and Psychological Factor (pp. 124-126)
- 3 Ideology and Social Character in Japan: New Crisis of Fascism (pp. 126-128)
- 4 On Democratization of Japan (pp. 128-131)
- 5 Anonymous Authority (pp. 131-132)

Original Title in Japanese

日高六郎／清水幾太郎「書評 ファシズムの心理——E. フロム『自由からの逃走』」(『世界』第75号、1952年3月)、123-132頁。

Note

Two leading sociologists in post-war Japan discussed on *Escape from Freedom*. One of them, Hidaka, is the translator of *Escape from Freedom*.



東京辯護士會司法制度調査委員会
副委員長 高木右門

新辯護士法第一條には、「辯護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする。辯護士は、前項の使命に基づき、誠實にその職務を行い、社会秩序の維持及び法律制度の改善に努力しなければならない」と規定している。

辯護士に課せられた、この根本的使命は、單に辯護士が受任した個々の事件を通してのみならず、一般的に在野法曹としての立場から現行法律制度の改廢、立法に對する鋭い批判を通して世論を喚起し、法律社会に指導的役割を果さなければならないという要請を示すものである。

昭和二十六年十一月一日から三日にかけて朝日新聞その他で、占領終了にともなう国内治安の維持について、政府が團體等規正法、集團示威取締法、ゼネスト禁止法などを構想していること、およびその原案なるものが傳えられた。そこで、東京辯護士會の法律制度に關する辯護士會である司法制度調査委員会

會においては、その内容がいちじるしく憲法に保障する基本的人権を侵害する時代逆行的なものであることを認め、まず、これを立案當局である法務府特審局の擔當官に、その内容を確めたところ、朝日新聞發表の内容は最終案においては多少の變動があるであろうが、本筋においては變らないとの回答をえた。元來、司法制度調査委員会は日本辯護士連合會の司法制度調査會と照應して、法律制度に關する政府當局の諮問に應え、または自發的に意見を具申する役目を持っているのであるが、事實、上述のようないわゆる治安立法が現實化されるときは、わが國の過去の歴史に徴して、平和的・民主的國家の再建が到底望まれないという結論に達した結果、東京辯護士會として積極的の意見を出し、もつて當局に建言すると同時に、日本辯護士連合會はじめ各地辯護士會に訴え、かつ世論を喚起する要あることを該委員會で決定、委員長一名、副委員長三名を主査として意見書を起草することを決議した。意見書の原案は十一月十三日に出来、これを同月十七日の全體委員會に附議したが、結局満場一致で可決された。

會つて、右の意見書は正式に東京辯護士會の意見書として同日新聞記者團に發表され、また法務府に東京辯護士會の建議案として提出され、他方日本辯護士連合會にも提出し、その統一かたを要請したものである。最近の新聞報道によると、政府原案なるものが、團體等規正法に關するかぎり、自由黨の内部や、政令諮問委員会の意見に左右され、「不法活動のおそれ」ある場合、裁判所の事實認定の制限、所有權沒收、強制調査權等の規定の撤廢、就職制限の範圍の縮小など豫想されるおもむきであるが、假にそう變更されたとしても、これら法案の遠慮性が到底拂拭できない底のものであることは意見書をよく讀んでいただければ、容易に理解されることと思う。要は程度の差いかんのことであつて、その本質をかえるものではないのである。われわれは、さきにかかげた辯護士の本根本的使命からして、これらの動きは當然のことと考えているが、辯護士會としては、はじめの試みであり、それゆえにその波紋の行方を注目しているとともに、自らの使命をあらためて再自覺し、あわせて世論の動向に期待するものである。

心理ファシズムの書評

— E.フロム『自由からの逃走』 —



日高六郎
清水幾太郎

對談

今日は日高さんのお話しに、な編輯部

た、フロムの『自由からの逃走』(創元社)を取上げてお話ししたいと思ひます。

フロムについて、日本でもいろいろ論じられた一時期がありました。それは主としてマルクス主義の立場からの分析であつて、ファシズムが起つて來た社會的・經濟的條件を資本主義の發達との關連で究明することが主でした。それから日本の特殊な條件がいろいろ問題になり、それに伴つてファシズムの定義などについても論争が行われたいと思ひます。そういう條件もさることながら、ファシズムというものは、必ずしも露骨な權力だけで——物理的な力だけで人を引きつけるのではなく、そういう力が使われるにしても、最も有効な心理的効果を綿密に測定しながら行使されるのが常であります。たとえば、よく太平洋戦争は、日本の軍部が國民を引きずつて行つたものだといわれていますが、引きずるといつても、國民を一人一人首に繩をつけて引つばるなどということはいふまでもなく、事實そんな形で行われたわけでもありません。無理を押しつけて力づくでやつたといへ、とにかくあれだけの大戦争が遂行できたということは、國民がそれに從

つて、右の意見書は正式に東京辯護士會の意見書として同日新聞記者團に發表され、また法務府に東京辯護士會の建議案として提出され、他方日本辯護士連合會にも提出し、その統一かたを要請したものである。最近の新聞報道によると、政府原案なるものが、團體等規正法に關するかぎり、自由黨の内部や、政令諮問委員会の意見に左右され、「不法活動のおそれ」ある場合、裁判所の事實認定の制限、所有權沒收、強制調査權等の規定の撤廢、就職制限の範圍の縮小など豫想されるおもむきであるが、假にそう變更されたとしても、これら法案の遠慮性が到底拂拭できない底のものであることは意見書をよく讀んでいただければ、容易に理解されることと思う。要は程度の差いかんのことであつて、その本質をかえるものではないのである。われわれは、さきにかかげた辯護士の本根本的使命からして、これらの動きは當然のことと考えているが、辯護士會としては、はじめの試みであり、それゆえにその波紋の行方を注目しているとともに、自らの使命をあらためて再自覺し、あわせて世論の動向に期待するものである。

つて、ゆくような社會的心理が介在して始めてできたことだと思ひます。ところでそういう方面の研究は、日本ではたいへん遅れているのじゃないでしょうか。ファシズムをそういう観点から考察した研究はほとんどなく、それに觸れても専らイデオロギイ論として展開されています。ところが最近の情勢の動きは、非常に警戒しなければならぬ傾向をたどつていて、從來あまり取りあげられずいたこの問題に對して、私たちの注意を促しているように思われるのです。一そんなじつと共り戦争の危険が日ごとに強くなつて來ると共に、人々のものの考え方、感じ方を形づくるのに、ラジオであるとか、新聞であるとかいふ、いわゆるマスコミュニケーションの手段の演じ得る役割が大きくなつて來ていて、大體的に人間を一定の方向に引きずつてゆく。一ほかの方法では、ほとんどそれに對抗できないようにさえ感じられることが多いのであります。こういう日日の経験からいつても、ファシズム的傾向と社會心理の問題は、十分に見きわめる必要があり、フロムの研究はわれわれの注目に値すると思うのです。そこで、日高さんから、この書物の紹介をお願いしたいと思います。



一、一つの文明批評
— フォッサシズムの心理 —

日高 フロムは、御承知の通り、ナチに追われてアメリカに移住した精神分析學者ですが、アメリカに渡りましてから、いわゆる新フロイド主義の先驅的な人物として、ホルネイとか、アレクサンダーとか、カーディナーなどとともに、かなりはなばなしく活躍している人です。だいたいは新フロイド學派の書いたものは、文明批評的な色彩の濃いものが多いのですが、今日ここでとりあげるフロムの著『自由からの逃走』も、厳密に科學的というより、一種の現代の文明批評として受けとつたほうが面白いと思います。

この本のべていることをよくかいつまんで申し上げますと、フロムは、人間が個人としての自己にめざめ、それ以前の封建的の束縛から解放されて、新しい自由を獲得する時期を、だいたいのルネッサンスと宗教改革のころとおさえて、それ以前は、人間は比較的小さな集團の中に埋没し、フロムのいわゆる第一次の絆につながれて、あたえられた社會的役割を果しながら生活していたと考えて

います。そこで當時の人間は、自由は持つていなかつたのですが、一應の安定感があつたのとべています。それがルネッサンスと宗教改革を轉機として、人間はさまざまの自由を獲得するのですが、その獲得した自由には明るい面と暗い面との二つが絡み合つていた。すなわち一方には、人間の獨立とか、個性の自覺とか、一切の束縛からの解放とか、そういう明るい面も確かにあつたが、それと同時に、それ以前の社會生活で経験して来たような、安定感を失い、精神的には孤立感、不安感になやまされるようになった。このことをフロムは、資本主義經濟を商品經濟という面からはつきり扱っているのです。

ところが、このように心理的にも不安定になつた人間に二つの解決の方向があたえられた。一つはフォッサシズム的な權威に對する無條件降服という方向、もう一つは新しい人間關係の中で新しい自發的な行動の可能性を獲得する方向、この二つの方向が與えられた。この第一の方向のフォッサシズムですが、ここでフロムが強調していることは、フォッサシズムというものは、單に社會經濟的な條件あるいはイデオロギー的な呼びかけだけで大衆を引つぱつて行つたのではなく、もちろん

近づけば近づくほど、この書物の本筋に入つてしまつたためか、心理的な問題ばかりになつて来て、社會及び經濟の構造的問題の重量が急に減つて来る。そう思いませんか。それは、ただフロムがそういう仕方で敘述しているだけなのか、それとも、フロムの敘述を離れて、事實としてそうなのか。最後のところでは民主的社會主義という言葉を使つて、フロム自身の考へて、新しい社會の豫想を述べている。しかし、私たちが素直にあの本を讀んでいる限り、フロムは、結局、一種の人生論みたいなものに流れ込んでしまつてうな氣がする。社會的、經濟的な問題が人生問題に解消してしまつてうな氣がする。どうも、最初からフロムの批評になつてしまつた。

日高 いきなりこの本の批判になつたわけですが、これはおつしやる通りの面が非常に強いと思います。さらにその面は、この後のフロムが書いてある倫理學の本と宗教哲學の本ではいつそう擴大されて、一種の人生哲學になつて、ほくなどにはどうもついていけないのですが、しかしそういう考え方がアメリカや、英國などで非常に歓迎されたという點に、一つおもしろい問題があると思います。

大體フロイドはアメリカでは、一九二〇年代には「性の解放」とか「婦人の解放」とか非常に安易な形で入つて行くのですが、それが一九二九年の例の恐慌で、頭から冷水をかけられた。そこで一九三〇年代にアメリカ人なりの社會意識が目覺めて行く。ちやうどそのころに、ハンガリーの方からカレン・ホルネイが行き、ドイツからフロムが行つた。それホルネイやフロムなどがフロイドを修正して、社會學化して、いろいろのものを書き出す。それがアメリカ人の注文にびつたり嵌つた。つまり一方では、社會經濟的な問題に對する一應批判的な目があるが、同時に、その救濟策を——單に社會經濟的な方法によつただけでなく、それも大切だが、もう一つ心理學的な次元でも救濟というか、解放というか、そういうものが必要だということが指摘されている。この二つの面がうまく結びついていたので、アメリカでは非常に喜ばれたのだらうと、ぼくは思つています。

清水 僕もそうだと思う。それと同時に、戦後の日本に於ける學問的研究のうちに出て來ている一つの顯著な傾向がアメリカの心理主義だということ、これは輕視出來ぬ點だと思つています。日高君の言われたことは、アメリカ

それは缺くことのできない條件ですが——もう一つ、ある特定の階級のソーシアル・キャラクター、すなわち心理的な社會的性格というものを無視することができないということ。ドイツ、イタリアのばあいには、それは下層中産階級ですが、これらの社會經濟的條件ばかりではなく、その孤獨感や劣等感になやまされて来た心理的性格が、フォッサシズムをさだてる温床だつたというわけですね。そしてモクラシイがフォッサシズムに十分抵抗できるだけに強力となるためには、デモクラシイのイデオロギーだけでは不十分で、それが、各人の心の奥底にまで沈澱しなければならぬというのが、フロムの結論になつてくるわけですね。

人間の救濟
— 社會經濟的要素と心理的要素 —

清水 ぼくが讀んで感じたことの一つを言いますと、中世や近世初期について述べているときは、フロムは、社會の構造的な問題を相當重視しているように感じます。構造的なものから直接に心理的な問題を引つぱり出していると思つています。ところが、時代が現代に

カの社會科學を貫く心理主義の問題になるのしょう。アメリカでは、社會や經濟の科學的研究が、押しつめて行くと、心理學或は社會心理學になる。少くとも、これらによつて支えられている。下世話な形でいうなら、社會や經濟の問題が、人間の心がけただけでどうにでもなる、或は、どうにかなるという見方。積極的な面からすれば、やがて教育の力によつて處理出來るといふ考へ方。これがアメリカの學問の大きな特色だと思つた。その後には、一九二九年の恐慌による打撃もさることながら、まあ、何とか、社會の基本的な制度に觸れないで、問題を技術的に處理し得るだけのアメリカ社會の明るいゆとりが大きくなるのをいつて來た、と同時に、他方では、構造や制度に觸れることの恐怖、その回避の氣持も働いている。日本は、傳統的にそういうゆとりがない國で、戦後そのゆとりがますます失われたときに、アメリカの心理主義が、日本の學問の諸分野にハイカラ且つ正しい傾向として受け入れられて來たわけだ、ある機会にぼくが書いたように、ストーヴが欲しいときに扇風機をもちつたのだとも言える。編輯者のお話にもあつたように、確かに、日本では心理學的問題が不當に輕視さ

Property of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



FROMM Online

れて来ているし、私などにも、この傾向を認めるようとしてなにがしかの努力を拂つて来ているのですから、その意味では、フロムは、明らかに、一つの薬だと思ふ。けれども、アメリカ萬能の現在を考えると、逆に、行き過ぎて心理学萬能になつてしまわぬように注意する必要もある。

日高 ただフロムの場合には、ある程度資本主義社會に對する批判がはつきり出ている。そこがフロムの他に比較して積極的な面じゃないかと思ふのですが、一番最後のところで、計畫經濟に基く民主的社會主義という條件がないかぎりには、問題が解決できないということをはつきり言つてゐる。これはアメリカの社會學者の常識からいへば、かなりラジカルな立場じゃないかと思ふ。

清水 全く、アメリカとしては、そうでしょうね。日高君はフロムのいわゆる「愛と仕事」というのをどう理解しましたか。この本の最後に「愛と仕事」というものが、例の自發的要素として急に飛び出して来る。現代の人間は、愛と仕事を通じて、一方、他の人間との間の關係、他方、自然との間の關係を整え、出直すことができる。現代の人の再生が實現するというらしい。一つの救済策のつも

日本人のイデオロギーと、日本人の社會的性
格とのギャップを、フロム流に掘りさげると
おもしろい問題が出て来るのではないかと
思ふのです。

清水 ホツボツ本論に入るかな。戦後、日本で封建性ということが盛にいわれ、至るところで封建的態度の批判が行われた。この封建性の心理的な内容と、フロムがこの本で指摘しているものと、双方は殆ど同じように思われる。フロムが指摘しているのは、言うまでもなく、現代的なものでしょうが、日本の場合は、一體、どうなんでしょう。フロムとは違う封建的なものなのか。それとも、封建的なのではなく、フロムの指摘している現代的なものなのか。または、両方が絡み合つてゐるのか。

日高 日本では、フロム的にいえば、第一次の絆の當時からもちこされた服従的性格と、それから解放された近代的社會のなかで再び巨大な社會構造に直面した人間の、服従への衝動といふか、自分には手におえないからどうでもいふようにやつてくれといふ服従精神とが、こんがらがつてゐるのですね。フロムに従つて、ナチズムを考えてみる、それは日本のファシズムと大分ちがう

りでしょうが、どうも、唐突な感じがする。僕は僕の『社會心理学』の中では、この兩者は、社會主義社會が生れた後の、人間對人間、人間對自然の關係を指すものと解して、肝腎の社會主義革命の話が省略してあると見たのですが……。

日高 それは、社會經濟的な目標、たとえば、社會主義的な計畫經濟というふうなものを、心理的な言葉に翻譯したものと解して解釋するのがいちばん工合がいいのではないでしょうか。ただフロムのばあい、愛とか活動性(仕事)とか、自由とか、平等とかいうものが、フロイドの場合と違つて、社會的關係のなかで誕生すると考へてゐるのが特徴です。たとえば自由や平等に對する人間の要求というのものも、單純に社會經濟的な要求だけではなく、人間の誕生以來の經驗、つまり兩親から抑壓されて、そのほかの大人どもからいろいろいじめつけられてきた、その經驗を根に持つてゐるので、その心理的要求に、外側からたとえば、社會主義的イデオロギーが呼びかければ、いつそう強くアピールするといふように説明してゐるのです。

と書いて、マソンの場合には、一應近代化の洗禮をうけた個人が、資本主義經濟の中で非常に傷めつけられた。そして心理的には自由競争の中で深い孤獨感とか、不安感に迫り、込まれ、それから逃れるための救いとして、ナチズムにとりすがつて行つた。日本の場合にはそういう段階を通過しないで、いきなりずつとファシズムの方に移つて行つた。また現にそのような形で進行しつつある。たとえば、憲法を全然無視して、實質的に再軍備が行われてゐてもたれも怪しまない。あるいは言論の自由が現實に奪われてゐても、それを怪むものがない。外はデモクラシーの看板で、中身はファシズムである。しかもファシヨ的なことをやつてゐる當の御本人も、自分は民主主義者だと思ひこんでゐる。結末です。つまり思想的自覺というものが、全然ない。結局日本ではデモクラシーという看板のまま、ファシズムが成立してゐるのだ。ドイツの場合には、フロムは孤立した個人の不安感というものをしきりに強調しているが、これはわれわれには十分理解できないほど、強いものだつたのかもわかりませんね。

編輯部 清水さん、どうでしょう。ナチ

日本人における

イデオロギーと社會的性
格 — 新しいファシズムの危険 —

日高 はじめに批判をやつてしまつたのですが、しかしほくはこの本からいろいろのことを學ぶことはできると思ふのです。フロムは、歴史を動かすものは、社會經濟的條件と、イデオロギーと、社會的性格と、この三つをあげていますが、これはとくに變動期の社會の分析には面白い手がかりを提出してゐると思ふ。もし正常な社會の發展というものがあれば、それは社會經濟的條件の地盤がゆるぎ出し、同時に新しい新興階級が登場して来る。それは新しい社會的性格、あるいは人間類型を持つたものです。ついで新しいイデオロギーが、その階級の主張を代辯し、社會に新しい方向を指示するものとして出て来る。ところが日本の場合には逆に、戦後の場合を考へて見ても、最初にデモクラシーというイデオロギーが入つて来る。そして外側から社會經濟的條件がいじくられる。ところが最後に取残されたものは日本人の性格で、これが猛烈な勢いで、社會經濟的、あるいはイデオロギー的變革を邪魔してゐる。このような

の場合には、とにかく社會主義を標榜する政黨として出發し、大衆運動を通じて政權に近づいていつたでしょう。ファシヨといつてもそういう大衆運動はありませんでした。ファシヨ的な勢力が政權をつたのは、日本の特殊な政治的構造を利用してでした。何も大衆的の政治運動をやらなくても在來の政治構造の中に權力に近く近道があり、權力を握つてしまへば、勝つては官軍で大衆をも引きずる錦の御旗を自分のものにすることができると。そういう形で行われましたね。

清水 丸山眞男君が、ブリリアントな論文「日本ファシズムの思想と運動」の中で説いてゐる通り、日本のファシヨは、大衆運動の形をとらなかつた。大衆運動の形をとるものは簡単に壓倒されてしまつた。政府的なものを中心になつて引きつたわけですね。

編輯部 フロムなどはそれをどういふふう

に説明するのですか。
日高 ドイツのばあいには、大衆運動となつた。御承知のように、ナチの出現するまえには、一應社會民主黨と共產黨とで、ドイツの有權者の過半数を獲得してゐた。ところが、フロムにいわせれば、かれらは廣さにおいてドイツの労働者なり、知識階級なりをとりえ



FROMM ONLINE

ていたが、深さにおいてほとんできていないかつた。かれらはイデオロギーとしては社会主義を支持していても、その社会主義思想で心理的欲求を満足させてはいなかった。そこへヒトラーがでて、とくに下層中産階級の社会的性格にたくみにつけこんで、たちまちのうちに、かれらを深さにおいてとらえたというのです。

しかし一寸誤解のないためにつけ加えたいのは、フロムはイデオロギーなど役に立たないと言っているのではないのです。だいたいヨーロッパではイデオロギーというか、理想というか、そういうものに對する信頼が非常に強いんじゃないかと思えます。ヨーロッパの場合には、ある社会的イデオロギーは、映画の豫告篇のようなもので、すくなくともこのイデオロギーを來週は上映して見せるといふような意欲がある。日本の場合は、イデオロギーはいつまでも豫告篇でおしまい。ですからもし世の中は理窟通りには行かないといふ論理でフロムを受ければ、これは日本人にとつて馴染の深い論理なんです。ところがイデオロギーの力が強いヨーロッパやアメリカで、それとらんで、一種非合理的な社会的性格といふものを、歴史を動かす力として述

のもの大きな特色であつた。例えば、日本人に残忍な態度があるとすれば、また日本人に事大主義的な態度があるとすれば、更に、日本人に非合理的な態度があるとすれば、そういうものは、どれもこれも、あげて封建的なもの、乃至は封建性の名残りであるといふ調子で解釋された。従つて、そういう封建的なものを拂拭しさえすれば、近代人になれるものが解決するといふ行き方があつた。フロムを讀みながら気づくのは、日本人の封建性と呼ばれて來たもののかのなりの部分が、それ自ら近代的のものであり、また、少くとも、近代的なもの結び合わされ、重ね合わされてゐるものだといふことです。日本人の弱點や缺陷が單に封建的なものとして考えられ、近代的な態度を持てば片づくといふことなく、實は、社會の近代的條件の中から、従つて近代的の人間の中から出て來ている諸結果も、無造作に一括して封建的とされてしまつてゐる。それに、療法として、終戦以來、十八世紀風の古典的民主主義という季節外れのもののが日本の中に導き入れられたのは、いかに自然の成行とはいへ、工合のわるいことでした。十八世紀風の思想がハイカラなもの、O・S・Sで齎つてゐるもののように

べたところに、フロムはむこうでは却つて新鮮な感じであつたのだらうと思ふ。ですからイデオロギーと社會的性格のバランスが、日本とヨーロッパ、アメリカとでは非常に違ふといふことを動定にいれて、これを讀む必要があるんじゃないかと思ひます。

清水 わが身の問題として考えた場合、一體、日本では、どうしてイデオロギーが民衆の中に入つて、そこに根をおろすという形をとらないのでしょうか。ドイツに生れたイデオロギーならば、何といつても、ドイツの人情、ドイツの問題、ドイツの山河の影ささへ宿してゐるといふ感じがする。日本に行われてゐるイデオロギーは、それ自ら非常に立派なものもあるし、學者や思想家にしても必ずしも乏しくないけれども、なかなか日本といふ土地になじまない。國民の間に根をおろすといふことがない。ジャーナリズム、總じて文字或は活字の平面にだけ築いて、それでお仕舞い。この點、東洋の遅れた諸國といわれゐる國々の方が遙かに本格的だ。三民主義などは技術的の面から行けば粗雑なものとも言えるし、いくらでも批評は出来るが、しかし、やはり、孫文の書いたもの、中國のものといふことが強く生きてゐる。日本の、或は

日本に於ける社會思想は、形式的に形の整つたものはたくさんあるけれども、これは日本に出たものだ、何といつても日本のものだといふものは、殆ど見當らぬ。近代的科學的要素を含めば含むほど、フワリと浮いたものになる。自由に別のものとして交代できる。

日高 ヨーロッパ、アメリカにたいしては後進國、逆にアジアに對しては主人公顔をした先進國といふ歴史的条件が根本でしようね。その點で中國などといふぶん違つてくる。フロム的にいへば、日本は世界の下層中産階級でしようね。

に受取られたのは、仕方がないことではあるが、やはり、まずいことだ。日本は、一方では、遅れているとはいひながら、他方では、近代人共通の苦惱や困難があつて、それがくしやくしやと一緒になつてゐる。だからドイツの人間より幸福なのか不幸なのか、それはよくわからないが、両方が結び合わされてゐるといふことはつきりつかんで行かないでばいけぬ。フロムの描くドイツ人にして、近代の自由の傳統はあるに違ひないが、それにも拘らず、あのメンタリティーはいわゆる日本人の封建的態度と殆ど區別できないものが多い。自由の傳統がどこに生きてゐるのか、僕には餘りはつきりしない。——今、よく覚えていないけれども、ポツダム宣言には、日本に民主主義を建設すると書いてはななくて、民主主義を復活させると書いてあつたように思ふ。日本が戦争の前に一應議會政治の時代を持つていたことを指しているのではありません。そういう時代があつたにもかかわらず、駄目になつてしまつた。日本人は未經驗ではなく、經驗して落第した譯で、以前に落第した原因を深く探らなかつたら、探り當つて、それを除去するのになかつたら、われわれは何度でも落第する。民主主義に及第する

清水 日本に一群の近代主義者がいて、戦後、かなり活動した。日高君やはくもその仲間かな(笑聲)。と言うより、戦争の後、たれも彼も自分を先ず近代主義者の立場に立たせて、それから徐ろに發言するといふ傾向がありました。今もあるやうです。自分が近代主義者になつて、日本の封建的殘滓を批判する。そういう批判の仕方。これは、單に眞實の近代主義者だけでなく、戦後の日本の思想界で

には、資本主義と共に發達して來た古典的な民主主義では駄目だ。それからフロムも觸れてゐますし、最近コールの論文集 Essays in Social Theory でも見たのですが、近代國家という規模で民主主義が行われるといふのは無理な話で、近代の國家は、人間が民主主義的に處理するにはあまりにも大き過ぎる問題や條件を含んでゐる。個人々々が一票を投じ、その機械的集積を通して、國家全體が民主主義的に運営されて行くといふことは、非常にラショナルのように見えるが、むしろ一片の夢と言ふべきだ。昔の社會なら、互いによく知り合つてゐる人たちの間で、互いによく知つてゐる問題について話し合える。民主主義的に處理できる。ところが、今日では、社會が大きくなり過ぎてゐる。コールのいわゆる Hugenots ということ、民主主義はこれに直面して本當に困つてゐるのです。コールは、個人を基礎とせず、小さい、それ自ら民主的に運営できる集團を基礎とし、これを通して國家の民主的運営を考えてゐる。一九四一年の論文では、ドイツ軍の攻撃によつて荒廢したヨーロッパ各地の、財産を失ひ家を失つた不幸な人々の間に、自然的な協力によつて生れつつある小さいグループ、これこそ新

Property of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.
FROMM Online

しいヨーロッパの民主主義の土壌だと言っている。現代の社会及び國家のヒュージネスというものは、小さい島國とはいえず、日本でも眞面目に考えねばならぬでしょう。若し日本の民主主義を眞面目に考えるのなら。何れにしても、現在のように、民主主義を漠然と十八世紀風に考えていると、いや、實はそれさえ怪しいのだが、看板だけは民主主義で、内容は全然違つたものになるのは必然の運命です。人民民主主義が何か知らないが、はつきりと資本主義を乗り越えた民主主義の形を作り出さぬと、元も子もなくしてしまふ。呑氣な顔して封建性批判をやつてゐる時ではなさうです。

日高 フロムは労働組合についてもそういうことを言つておりますね。労働組合は、資本主義経済に傷めつけられた人間に一つの自信をあたえる場所になり得るけれども、労働組合自身が巨大なものになつて、その中における個人の創意や自發性が全然問題にならなくなつて行く、そういうことを指摘している。その點は清水さんの言葉でいえば、機械主義時代というものの運命ですね。それからさつきの近代主義ですが……。

清水 そろそろ異論が出て来るかな。(笑)

「経済ならミスやマルクス、哲学ならカント、それを原語で讀まねば、という調子になる。ばくらの氣持の中には、謂わば一つの傾斜がある。抗し難い傾斜がある。學問のことを一生懸命やろうとすれば、その途端に、西洋の中に深く入つてしまふ。日本の民衆へのサービスの氣持のないこと、それと、眞面目になつた瞬間に西洋に弱れるということ、この二つの事情を結びつけると、日本に即した、日本の民衆の生活や問題に即した學問が非常に生れ難い。この點で僕は、中共の政治家やインテリの書いたものに心から感心しています。これ等の人々が一様に示している民衆の生活や問題に對する深いつつ正直な關心、民衆に對する謙虛な態度、い且つ正直な關心、民衆に對する謙虛な態度、これを思うと、今後、中國に新しい學問の目覺ましい發達が行われるのではないかと考えます。さて、學問的活動が積極的な意味を持つる場合、二つあると思つてゐます。一つは、學者の間で現に問題になつてゐることを取り上げ、もう一つは、民衆の間で問題になつてゐることを、民衆が出會つてゐる困難、それを解決しようとする場合です。日本では、この第二の基準が、前にも述べた通り、學問や學者の間で殆ど生きてゐないのではないかと

（聲）

日高 フロム的に考えれば、戦後のいわゆる近代主義もイデオロギーと社會的性格のギャップをどうするかという問題だつたと思つてゐます。たとえば加藤周一君——かれは近代主義の純粹理想型じゃないかと思つてゐますが、加藤君の話では、小説を書いて一番困るのは、會話の部分と地の文とのつながりがつかない。會話の所ではどうしても庶民くさくなると、地の所ではまったくヨーロッパ的感で、人間を眺め、自然を眺め、ものを考へてゐる。そのギャップをどうしても埋めることができないと言つてゐた。問題は、イデオロギーは、社會的性格を利用、あるいは逆用すべきか、それとも純粹型で行くべきかということ、そこは政治的發言のばあいと、文學者の創作などのばあいという違ふかと思つてゐます……。

清水 そういう問題が出て来ると、勢い、平素僕の胸中にあることをぶちまけざるを得ないことになりまふ。自分を含めて言うのですが、筆をとる人、物を考へる人は、ほんとうに自分のまわりにいる日本の民衆を仕合せにしようという氣持があるのでしょうか。一それを口に出すというのでなく、この氣持

そして、學者の間の問題だけが本當の問題だということになり、而も、その學者が會つたこともない西洋の學者であるとなれば、學問や思想が日本の民衆に食い込まぬのは當然。食い込んだら、かゝつて不思議です。學者は、口を開くと、民衆は出直さねばいかん、反省せねば駄目だ、と言いますが、先ず、學者の口が出直して反省せねば話が始まらない。新しい出發は辛いにきまつてゐる。しかし、民衆の生きた経験、ユニークな経験、それを組み立てることによつてのみ、日本の山河の影を落した學問が生れるのでしよう。何か獨自のものが生れ、それを通じて、學問の普遍的公共の世界への寄與も出来るのでしよう。論理と経験との組み打ちがなければ、何も始まりません。大演説になつてしまつて恐縮です。何もない、學者に向つて、政治的大運動をやつて下さい、というのではない。自分自身の領域で、眞面目な反省の努力を重ねて下さい、というだけのことですよ。

日高 おつしやる通り、日本の學者には、民衆への愛情というものが非常に缺けてゐる。日本の學者ほど權威主義の強い人種もない。アメリカの學者とこの間握手をしたといつて喜んでいるような人物だつていないこ

が暗黙の前提になつてゐること、これが何より大切なことと僕は思う。大學教授が汽車の中などで、突然たれかに話かけられ、「この會社にお勤めですか。」と言われると、どうも腹を立てる。日高君も少しは腹を立てると思つてゐます。(笑聲)馬鹿にするな。こう見えても、大學教授だぞ。床屋でも煙突掃除夫でも、はつきりと或るサービスをして、その報酬を貰う。日高君は別として、學者という代物は、一體、どれだけ民衆にサービスしてゐるのか。サービスしてゐるから、サービスする積りがあるのか。ばくは、耳聞のせいとか、また、質の悪い人間にばかり出會つてゐるせいとか、社會科や人文科の方面で、サービスしてゐる人、サービスする心がある人に殆どぶつからない。サービスしないで民衆から尊敬だけを得ようというのは、また國民の税金で食わせて貰おうというのは、圖々しいというほかはない。

もう一つの問題は、日本で學問をやろうとする時、後進國の悲しさ、まじめにやろう、根本的にやろうと考へれば考へるほど、西洋の學者の立てた問題に深入りしてしまふ。弱れてしまふ。そこから日本の民衆の問題へ立ち戻つて来られなくなる。「往きはよいよい」とは、思つてゐる。ただその愛情はやつぱり現代社會の論理のうらつげがなくて、無力だということも事實だと思つてゐます。フロムもラヴということを持ち出しています。ホルネイは、逆に現代人は愛情というところにあまり大きな期待をかけ過ぎて、日常生活の苦惱を、一度に解消してくるような愛情を求めてさまよつてゐる。ところが現代社會の論理は違つた次元で動いてゐるので、待ちうけてゐるのは失望しかないといふことを言つてゐますが、これは非常におもしろい考へ方じゃないかと思つてゐます。

五、匿名の權威

清水 元來、フロムは心理の問題を中心に置いていることは認めるのですけど、この本を讀みながら、僕は「無いものねだり」の氣持に陥つてしまつたためか、資本主義の問題が常に氣にかかつて仕方がないのです。ラスキは、御承知のように、民主主義と資本主義とは兩立しない、民主主義を選ぶなら、資本主義を捨てる、資本主義を選ぶなら、民主主義を捨てる、と、切迫した形で繰返して主張し



FROMM, Erich

《住宅問題》

東京の屋根の下

向坂逸郎 著
壺井正一 著
吉村正一 著



住宅と文化

向坂逸郎

吾々は戦争で大事なものを澤山失った。失った最大のものは、人間の生命であろう。それから國の獨立であろう。國の獨立の喪失は、日本人の精神に大きな影響をもたらす。物質的にも影響する。例えば住宅問題にも無関係ではない。

戦争で吾々の失った住宅は、『國土建設の現況』（建設省、昭和二十六年七月）によると二百六十五萬戸（内、空襲によるもの二百十萬戸、疎開取壊によるもの五十五萬戸）にのぼっている。惜しげもなく破壊したものだ、と終戦の数日後に焼跡を見わたして思ったものである。昭和二十四年三月末現在の全國の住宅不足数は三百六十八萬戸である（建設省発表、『住宅問題』住宅問題研究會著、相模書房版一九五一年による）。その内譯は、次の表に示されている通りである。

| 空襲によるもの | 疎開によるもの | 戦災死による |
|---------|---------|---------|
| 二、一〇〇〇 | 四、五〇〇千戸 | 三、〇〇〇千戸 |
| 要 | 需 | 減 |
| 要 | 需 | 減 |

ています。ただフロムの本が心理学の本だからというだけでなく、フロム自身がこの點を深く掘んでいないために、フワフワしたものになっている。しつかり掘んでいけば、いくらか心理学の本でも、別の形になる。——しかし、僕はパン屋へ行って酒を買ってくれ、と喚んでいるのだから。

日高 だが、いわゆる新フロイド學派の中では、フロムがその點が一番自覚的ですね。ホルネイなどになると、資本主義の問題は捨てられて、いわゆるマス・ソサイエティだけが前面に出ている。しかしフロムは一應両面をとらえている。もつとも構造的な分析が弱いのは精神分析學者ですから仕方がないとも思います。

清水 そうですね。僕がせつちかちなのです。しかし、僕もせつちかちですが、僕以上に、民衆はせつちかちです。とにかく、フロム風に考えるにしても、現在の日本は、ファッショになって行く心理的な下地がある、というより、あり過ぎる。ぼくなどは、特殊な人格でもありません。一個の平凡なジャーナリストですが、この僕を教祖に見立てる人の多いことといつたら……。大宅壯一氏に言わせると、清水は教祖的性格があるそうですね、本當に

そうなら、僕は嬉しい。しかし、これは嬉しいがらせの文句のようです。だが、僕などを一種の小教祖に見立てて、これに頼るという風潮、これは恐ろしいと思いませんか。自分で自由に考えるのが民主主義の約束だといつても、今日のようにベラボーに複雑且つ巨大な社會の眞中に投げ出されて、而もひどく草臥れていけば、そんな悠長な約束を守るより、もつとせつちかちになりますね。現在の日本では、命令を待ち望む心理が實に強く支配している。ぼくなんか恥ずかしくて、とても、命令を下す勇氣はない。命令するのは、民主主義の原則に反する、自分で考えなさい、などと言う。丁度「世界」編輯部と同じ考え方を持っている譯です。（笑聲）けれども、僕がそんなことを言っているうちに、體格のよい男が現われて、「よし、おれについて来い。」と言つたら、悲しいかな、多くの人は、黙々と、その後について行くでしょう。もう、そこへ来ています。この時、誰がいかにして民主主義を教うか。また、この時、民主主義はいかなる形のものであるべきか。

日高 もう一つ、フロムのいう「匿名の權威」というものもある。フロムのばあいは世論ですが、實際では口團つとあまいな、そ

れでいて強力な、もやもやした社會的壓力があります。この間神奈川縣のある小さな村で、衆議員選挙のときにたれに投票したかというところを、インクグーで言つてもらつた。ところが、實際は社會黨、共產黨に入れた人がかなりあるのに、仲々それをいわない。逆に、一番たくさん投票をとつたのは自由黨の候補者なのですが、それに投票したというのが賛数より上まわつて出て来る。つまり多数意見はますます多数になるし、少数意見はますます少数になります。こういうところにも、大きな問題がかくされていると思います。

清水 輿論は、今日では、ひとりひとりの人間の内部に働く理性や判断の集積ではなく、つまり下からのものでなく新聞やラジオが上からおつかふせるものなのです。而も、例の輿論調査という奴が、こうして自分の手で作った雪達磨を一層大きくすることになる。全く馬鹿らしいが、深刻な問題ですね。——今日の對談は、僕は日高君の氣持が判り過ぎ、日高君も僕の氣持が判り過ぎて、うまく發展しませんでしたね。

編輯部 どうもありがとうございました。（創元社刊）



Gift - from Miss. N. 10

世界



第75号
昭和27年3月

日本民族の更生の途
再軍備の問題をめぐりて
小泉博士の「平和論」について

恒藤恭
安倍能成
都留重人

— アジアの現勢 —

新しきアジアの展望
ネールと二つの世界
日本の友へ

L. ロジンガー
D. リリエンソール
J. クマラッパ

官 價
中國との條約締結をめぐつて

鷗 飼 信 成
入江啓四郎
日本新聞協會
東京辯護士會

團體等規正法批判

東京の屋根の下

向坂逸郎
吉村正一郎 壺井 栄

繪畫のみかた

矢崎美盛
中村研一
直井 深雄
豊島與志

(創作) 淵 縁 體
(創作) 絶 縁 體

岩波書店

編集発行吉野謙二郎 印刷者柳川太郎 印刷所東京都板橋区志村町5 凸版印刷株式会社
発行所 東京都千代田区神田島田内神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店 電話九段(3)0541番

快適の
頭脳よみがえる



従来の頭痛薬と異なる………脳の栄養剤

本剤は、新鮮な動物脳中から抽出した構
リポイドその他の栄養剤(コリン・イノ
シトール・グルタミン酸・メチオニン・
カフェイン)を総合的に含有する製剤で
脳栄養素の消耗を補い脳の疲労を回復し
ます 包装 錠・30T 注 1cc×10A 一と中興次郎見本送呈一

大阪市東区道修町二 藤沢薬品工業株式会社



国旗は日の丸 定期も日の丸
六ヶ月・千円で
幸運賞50万円当る
協和日の丸定期預金
◀ 只今お取扱中 ▶

協和銀行

本店・東京港区芝大門
支店・全国主要都市に二百三十余ヶ店

Propriety of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



3.